

論文審査結果の要旨

氏名 萩原 眞由美

研究背景および目的

高齢社会の進展とともに、わが国では慢性疾患を抱えて高齢になってから亡くなる者が増加している。このような状況のもと、終末期に入る前からのアドバンス・ケア・プランニング（Advance Care Planning：ACP）の必要性が高まっている。

しかし、国内におけるACPの認知度や実践意識は依然低く、前もって死の話をするなど「縁起でもない」とする社会全般的な意識や、明確に言葉にしない日本人の意思表示文化がACP促進の阻害要因に挙げられている。そこで、本研究では、自発的に死を語る草の根ムーブメントとして広まったデスカフェが、これらの阻害要因を緩和し、ACPの準備教育になるのではないかという仮説を立て、それを検証することを目的として実施された。

研究方法

上記目的を達成するために、研究は次の3つの方法によって行われた。第一の方法は質的研究である。これは、デスカフェに複数回参加経験のある24名を性・年齢を調整した4組に分けてフォーカスグループインタビューを行い、デスカフェ参加による生や死に対する考え方の変化を調べたものである。そして、その変化がACP実践につながる可能性を有しているのかどうか、生成されたカテゴリーやサブカテゴリーから詳細な検討が行われた。

第二の方法は、量的研究（介入研究）である。これは高齢化が著しい板橋区高島平団地地区に住むデスカフェ未経験の一般中高年者 41 名を二群に分け、各群 5 カ月間、月 1 回の頻度で 5 回デスカフェを開催し、介入の前後で精神的健康度や死生観、スピリチュアリティ、ACP の必要性に関する考え方や死に関する対話行動の変化を調べた。またその変化が ACP の実践を促進する可能性を検討した。

第三の方法は、第 2 章で行った前半・後半合わせて 10 カ月にわたるデスカフェのプロセス評価である。これはデスカフェ実践中に交わされた参加者の具体的な発言や、デスカフェ終了後の「思い」のどのようなところが介入研究の結果と符号するのかを振り返り、デスカフェの持つ ACP の準備教育の可能性を支持しているかどうかを検討した。

研究結果

3 つの方法によって行われた研究の結果は、論文では第 1 章、第 2 章、第 3 章としてまとめられている。第 1 章（質的研究）では、デスカフェ参加による生や死に対する考え方の変化として、【生について考えるようになった】【死について考えるようになった】【生や死について考えるのをやめた】という 3 つのカテゴリーが生成され、前二者は ACP の準備教育としての機能を有するが、最後のカテゴリーは ACP から乖離することが明らかにされている。また、前二者も含めたほとんどの人が、ACP の質は、終末期の医療やケアの選択に至る対話のプロセスにあることへの理解が不足していたとされた。

第 2 章（量的研究～介入研究～）では、継続的なデスカフェへ

の参加により、死生観の2因子「解放としての死」「人生における目的意識」と、スピリチュアリティの2因子「生きる意味・目的」「他者との調和」に統計学的に有意な上昇が認められた。また、ACPが必要だという思いには統計的に有意な変化はなかったが、実際に死について周囲や家族と対話した人が増えていた。

第3章（プロセス評価）では、デスカフェにおける参加者の具体的な語りと、終了後の「思いの変化」と、第2章で得た結果との整合性が確認できたとしている。

考察

第1章、第2章、第3章を通して、デスカフェはACPの準備教育になる可能性が確認できたとしている。デスカフェを続けるほどACPから乖離してゆく人もごく一部いたが、9割以上の人はデスカフェで死までの生を見直し、必ずおとずれる死を受容して自分事として死について考えるようになっていた。この変化は、ACPの準備状況を促進していた。しかし、ほとんどの人々はACPにおける対話プロセスの重要性が十分に理解できておらず、デスカフェだけではACPの推進には不完全であることが判明した。このことから、デスカフェでACP実践の準備状況を整え、同時に医療・介護の専門職によるACPへの正しい理解を進めることのできる協働プログラムの開発が望まれる、としている。

結論

質的研究と量的研究およびそのプロセス評価から「ACPの準備教育としてのデスカフェの可能性」が確認され、デスカフェにはACPの実践意識を高める機能があることが明らかになった、と結論づけている。さらに、自発的に死を語るデスカフェが持つ

その準備教育機能を活かし、自発的なACPの実践を実現するために、デスカフェと医療・介護の専門職による協働の必要性が示されたとしている。

以上、本博士論文は、高齢社会の医療および介護における意思決定に係わるアドバンス・ケア・プランニングが身近なものとなる上で、デスカフェがその準備教育を担えることを示した、極めて新規性のある、かつ意義のある研究である。特に、一般高齢者を対象に実施したデスカフェの介入試験は、国内で初めての試みであり、後進のものが参考すべき貴重な結果を得ている。論文の記述にやや冗長感があるが、研究背景の記述は十分であり、結果のまとめ方やその解釈は客観的になされ、導かれた結論も妥当なものと考えられた。

本論文（訂正前）は、事前に5名の審査員に配布された上で、審査および最終試験が令和6年7月4日女子栄養大学12401番教室で行われた。博士候補者による発表に引き続き審査委員との間で質疑応答が行われた。各質問には的確に回答し、当該領域に関する博士候補者の見識の深さが感じられた。引き続き12403番教室において審査会が委員5名全員の出席のもと開催された。各委員から講評と論文の修正に関するコメントがあり、論文訂正が承認された。後日、博士候補者が各委員を回って直にコメントを確認した上で訂正がなされ、最終の論文が提出された。

これをもって、論文審査がすべて終了し、全員一致で博士（保健学）の学位に値するものと認めた。

【論文審査委員】

(委員長) 教授 新開 省二

教授 武見 ゆかり

教授 田中 茂穂

教授 遠藤 伸子

東京都健康長寿医療センター研究所

副部長 岡村 毅